

376 骨シンチグラムに2転移巣を発見された乳癌患者の臨床的検討

東大医学部放射線科
桑島良夫、町田喜久雄、西川潤一、大嶽 達
渡辺直彦、飯尾正宏

乳癌の骨転移の早期診断には^{99m}Tc-リン酸化合物による骨シンチグラムが臨床的にすぐれていることが認められ広く用いられている。

われわれは骨シンチグラムを施行した66例の乳癌患者のうち転移巣を発見された24例についてTNM分類、組織診断その他との関係を検討したので報告する。

T分類では、T₁1例、T₂7例、T₃13例であった。N分類ではN₀6例、N₁14例、N₂1例であった。期別ではⅡ期8例、Ⅲ期が13例であった。Ⅰ期は0であった。

手術施行時から骨シンチにて転移が発見されるまでの期間は、6ヶ月未満5例、1年未満3例、2年未満8例、3年未満2例、4年未満3例であった。骨転移の部位は頭蓋3例、頸椎2例、胸椎2例、腰椎8例、肋骨8例、骨盤2例、四肢骨5例であった。組織診断では乳頭腺管癌ないし髄様腺管癌15例、硬癌9例であった。

結論として転移発生までの期間は数年に至るものがあるので長期の観察が必要で、特に腰椎、肋骨に注意を要すると考えられる。

377 骨シンチグラフィよりみた乳癌骨転移の経過

石丸徹郎、前田裕子、岡橋進、坂田恒彦、
山崎紘一、赤木弘昭（大阪医大、放）

臨床的に乳癌骨転移と確診された症例で、骨シンチグラフィを2回以上施行してその経過を観察しえた39症例について、見直し診断を行い、いろいろな角度からの検討を加えた。

骨転移の進展形式において乳癌は例外とされており、今回の検討でも、一定の方向性は認めえなかったが、（最大時転移骨数）-（初発時転移数）/（両検査間の期間）という単純計算値は、骨転移局所放射線治療施行症例が、非放射線治療症例に比し小さく、骨転移局所に対する放射線治療は、局所への治療であるとともに、他の骨への転移をある程度抑制する可能性のあることが示唆される成績となった。

378 集積パターンによる骨腫瘍のシンチグラフィ診断

中嶋 洋、青木康彰、姜 武、安江夏生
浜田秀樹（阪大、整形） 赤井喜徳、中村幸夫
大森英史、久住佳三、木村和文（阪大、中放）

骨シンチは、今日、骨疾患の診断において、有用な検査法として、広範に用いられている。Bone seeking agentとして、^{99m}Tc-diphosphonateの導入、及び、より分解能の優れた撮像装置の開発により、異常な集積部位を知るのみでなく、より正確な集積形態に関しても、情報を得ることが、可能となってきている。

我々は、良性骨腫瘍および腫瘍類似疾患67例、骨原発性悪性腫瘍36例、転移性骨腫瘍15例、炎症12例の計130例に対して、骨シンチグラフィを施行した。各腫瘍の集積形態、及び濃度を検索し、特徴的パターンの検討をおこなった。

379 骨シンチ異常集積の少ない原発性骨悪性腫瘍の検討

小野 慈、朝倉浩一、竹林茂生、小田切邦雄、
勝俣康史、猪狩秀則、池上 匡、野沢武夫、
松井謙吾（横市大・放）、酒井直隆、渡辺正美、
腰野富久（横市大・整外）

原発性骨腫瘍のうち悪性腫瘍は一般に骨シンチの異常集積は多く、病巣範囲はX線像に比し明確に示現されるが、ときに異常集積の少ない腫瘍をみることがある。昭和50年から56年の7年間に経験した骨シンチから異常集積の少ない症例の病理組織診、骨シンチパターン、頻度を検討した。

骨肉腫20例、軟骨肉腫4例、線維肉腫8例、細網肉腫2例、悪性線維性組織球腫、血管肉腫、悪性巨細胞腫各1例の計39例を対象とした。異常集積程度を、周囲の正常骨集積より少ないものを(-)、同程度かわづか多いものを(±)、周囲の正常骨集積より明らかに多いものを(+)、著明に多いものを(++)に区分した。(-)(±)の所見を呈した症例は8例にみられ、骨肉腫1、軟骨肉腫1、線維肉腫2、滑膜肉腫1、悪性線維性組織球腫1、血管肉腫1、悪性巨細胞腫1、であった。骨シンチ所見とX線像を対比し考察する。